

# Henry James の“The Last of the Valerii” に於ける“picturesque”について

森 豪

## On the Picturesque in Henry James's “The Last of the Valerii”

Tsuyoshi MORI

This paper's aim is to study what an idea, the picturesque in Henry James's “The Last of the Valerii” means. The picturesque is referred to beauty in a picture. It relates to the surface of an object, but has no relation to the deep structure of the object. It is not connected with any intellectual working of an observer. And it is embodied as a character, a count in the work.

“The Last of the Valerii” is told by a painter whose American god-daughter gets married with an Italian count. The painter calls the count “a picturesque husband.” The count is good and strong and handsome. He has a beautiful form, but has no spirit. He has an old historical background as an Italian, but he can not connect the historical with the present. He can catch the past only by his outward sense without intellectuality. When Juno, a Greek statue, is excavated from the soil of his villa, he is taken away from the present to the past by Juno, and he forgets his wife whom he loved so much. That accident is due to his lack of spirit, which means that he is a “picturesque” man.

### I

Keats が Wordsworth の特質を “the egotistical sublime” と言ったことが象徴するように、Wordsworth を “sublime” の詩人と考えるのは一般的なことだと思われる。Wordsworth が最も “sublime” な情景と考えたのはアルプスの情景である。彼は *Descriptive Sketches*<sup>1)</sup> に於てアルプスの情景を次のように描いている。

'Tis storm ; and hid in mist from hour to hour  
All day the floods a deeper murmur pour,  
And mournful sounds, as of a Spirit lost,  
Pipe wild along the hollow-blustering coast,  
'Till the Sun walking on his western field  
Shakes from behind the clouds his flashing shield.  
Triumphant on the bosom of the storm,  
Glances the fire-clad eagle's wheeling form ;  
Eastward, in long perspective glittering, shine  
The wood-crown'd cliffs that o'er the lake  
recline ;  
Wide o'er the Alps a hundred streams unfold,  
At once to pillars turn'd that flame with gold ;

Behind his sail the peasant strives to shun  
The west that burns like one dilated sun,  
Where in a mighty cubicle expire  
The mountains, glowing hot, like coals of fire.  
(ll. 332—347)

激しく荒れる嵐の彼方から日没時の日光が射しこむ様子が描かれているが、興味深いのは彼がこの詩行につけた注<sup>2)</sup>である。その注によれば、彼はこれらの sketches に “picturesque” のタイトルをつけようと思っていたけれども、アルプスの描写に至ってそのタイトルが相応しくないように思った。アルプスの “sublime” な様を描こうとすれば、「絵画の冷やかな規律」 (“the cold rules of painting”) では十分に自分の得た「感動」 (“emotions”) を伝えられない。一枚の絵としてこの情景を表現しようとすれば、光を落として陰影をつけなければいけない。しかし彼はその場の「印象」 (“impression”) に忠実に光によって “sublimity” を表現したのである。ここで注目しておきたいのは、想像力と結びついている「感動」や「印象」を “picturesque” という概念が包みきれないということである。

“picturesque”と違って想像力による「感動」や「印象」と密接な“sublime”な情景は、アルプスの情景の一部と考えられる“The Simplon Pass”にも描かれている。その情景は先に引用した嵐の情景と同じような「凄まじい情景」（“the sick sight”）である。明らかな違いは、情景描写の後につけ加えられた次の詩行である。

Tumult and peace, the darkness and the light—  
Were all like workings of one mind, the features  
Of the same face, blossoms upon one tree,  
Characters of the great Apocalypse,  
The types and symbols of Eternity,  
Of first, and last, and midst, and without end.

(ll. 15—20)

情景全体を「一つの精神の働き」（“workings of one mind”）と見なし、「永遠の典型と象徴」（“The types and symbols of Eternity”）と考えている。ここには高度な精神性と時間意識がある。彼の得た「感動」や「印象」が一つの“idea”として表現されている。そしてそのようなものも“picturesque”の範囲を越えるものだと思われる。

本稿で考えようと思っているのは、Wordsworthの“sublime”や“picturesque”ではない。Henry Jamesの“The Last of the Valerii”に於ける“picturesque”を考えるのが本稿の目的である。その場合のヒントとなるようにWordsworthの“sublime”と“picturesque”を垣間見ておきたかったのである。

## II

“The Last of the Valerii”<sup>9)</sup>は1874年に“Atlantic Monthly”に発表されたもので、アメリカ娘とイタリアの旧家の青年伯爵との結婚を扱っている。そこで伯爵は、語り手である画家によって“a picturesque husband”と呼ばれている。伯爵は“picturesque”を表象していると言え、彼を考察すれば、“picturesque”の性格を知ることができるように思われる。

この作品は、二人の結婚後二人の住む邸宅内に“Juno”の彫刻が発掘される事件を境に二つに分けられる。それに応じて伯爵も二つの異なった姿を示している。まず前半の伯爵の姿から見ていきたい。ローマで画家の「娘」（“god-daughter”）は、画家に伯爵を婚約者として紹介した。画家は外人との結婚に好感を抱けず当惑したが、二人は「絵画的視点から見て」（“from the picturesque point of view”）「お似合い」（“a strikingly well-assorted pair”）であった。「娘」は、伯爵の「威厳」（“grandeur”）

に魅了されている。画家に言わせれば、彼の「威厳」などは「王女の雰囲気や習慣」（“the air and almost the habits of a princess”）を備えている「若いアメリカ娘」（“a young American girl”）にとってとりたてて言うほどのこともなかった。「娘」は彼に恋をしたばかりに魅了されていたのである。

伯爵は「威厳」を備えていると同時に、「美」（“beauty”）を備えていた。彼は非常に美しく、「並の美しいローマ人にならぬ異様な美しさ」（“a more significant sort of beauty than is common in the handsome Roman race”）を備えていた。彼には「一種の表現し難さ」（“a sort of sunken depth of expression”）があり、その笑みは「重々しく鈍い笑み」（“a grave, slow smile”）で「知性の閃き」（“quickness of wit”）を感じさせない。しかし彼には「娘」の幸福を約束するような「実直さ」（“an unimpassioned intensity of feeling”）があった。また彼には「彼の国の人の気軽な都会性」（“the light, inexpensive urbanity of his countrymen”）がなく、理解してからはじめて反応するような「き真面目さ」（“a sort of heavy sincerity”）があった。結論として画家は、“He was perhaps a little stupid.”と言っている。彼は「愚鈍」なのである。姿や形は美しいが知性が欠如している。

過剰な感情移入をしない画家の目と伯爵に恋をしている「娘」の目は違う。彼女は彼を「善良」（“good”）で、「逞ましく」（“strong”）で、「勇敢」（“brave”）であると思っている。「逞ましさ」という点では画家も「娘」に同意する。彼は「ヴァチカンの胸像」（“some of the busts in the Vatican”）のようである。彼の顔の造りは、「力強く、見目良く、男らしい」（“powerful, shapely, and manly”）のものである。しかし彼の顔に感情の変化が見られず、その目は「磨いた瑪瑙」（“a pair of polished agates”）のようであった。彼は美しい容姿、形態を備えたところのみ価値のある、精神性の欠如した人物である。

更に画家は伯爵の精神性の欠如を決定づけるかのようになり、彼には「奇妙な単純性」（“a strange simplicity”）があり、“ideas”が全く備わっていないように思えると述べている。彼には「信念」（“beliefs”）も「希望」（“hopes”）も「恐怖」（“fears”）もなく、「感覚」（“senses”）や「欲求」（“appetites”）以外のなにもも備わっていないように見え、彼が自分の「指の爪」（“finger-nails”）を見ながらぶらついている様を見ていると、彼に“soul”があるのか疑わしくなってくるかと述べている。

伯爵は“a picturesque man”と呼べる。その彼に“ideas”も“soul”もない。Wordsworthのいう「外面

的感覚 (“the outward sense”) (*The Prelude*, XI, 188) のみの人間である。最初に垣間見た Wordsworth の “sublime” と “picturesque” との相違と比較しても “picturesque” という概念はここに於ても精神性を含みうるものではないように思われる。“picturesque” が精神性を含まないと言ってもそれは “ideas” や “soul” などの高度な精神性のことである。「外面的感覚」に対しては十分魅了する力を備えている。そのいい例が伯爵と「お似合い」である「娘」である。「似た者同志」という言葉があるが、似た性質をもつものが互いにひきつけあうようである。「娘」は伯爵に恋をしている。「娘」の恋そのものが彼女の精神性の欠如を示し、結婚の際に問題となった宗教に関して伯爵と同じように軽々しく改宗を申し出ることにそれは示されている。しかし彼女が「愚鈍」であると画家は説明していない。彼女には「すぐれた絵画感覚」 (“a capital sense of the picturesque”) が備わっているのである。しかしながら、これが高度な精神性を含んでいるとは言えない。伯爵も画家の描いた “copy” とその “original” を見比べる透れた能力を備えていたからである。これらは「外面的感覚」に属するものと考えらるべきである。

「愚鈍」は「外面的感覚」と共存しうる。「愚鈍」ゆえに事象が「外面的感覚」のみでとらえられるとも言える。「愚鈍」でなければ、「外面的感覚」でとらえられたものの精神化が図られることであろう。伯爵は次のようなことを述べている。

I'm an old Italian, and you must take me as you find me. There have been things seen and done here which leave strange influences behind! They don't touch you doubtless, who come of another race. But they touch me, often, in the whisper of the leaves and the odour of the mouldy soil and the blank eyes of the old statues. I can't bear to look the statues in the face. I seem to see other strange eyes in the empty sockets, and I hardly know what they say to me. I call the poor old statues ghosts. In conscience, we've enough on the place already, lurking and peering in every shady nook.

Don't dig up any more, or I won't answer for my wits!

(p.266)

これらの言葉は、「娘」の母親に「娘が伯爵と全く同じくらいに愛しているのは邸宅よ。」 (“It's the Villa she's

in love with, quite as much as the Count”)と言わせた程結婚後二人の住む邸宅に関心を持ち、「模様替え」 (“refurnishing the Villa”) を夢見ていた「娘」が、邸内に埋没しているかもしれない彫刻の発掘を伯爵に提案したのに対し、伯爵が答えたものである。伯爵は「歴史を背負ったイタリア人」 (“an old Italian”) である。「この土地の過去の出来事」 (“things seen and done here”) が彼に影響し、「木の葉のさざめきやかび臭い土地の臭いや古い彫像の虚ろな目」 (“the whisper of the leaves and the odour of the mouldy soil and the blank eyes of the old statues”) となって彼に接触 (“touch”) する。彼は彫像の顔を見ることができないし、彼に何を語りかけているかほとんど分らない。古い彫像を「幽霊」 (“ghosts”) だと思っている。「幽霊」はこの地に十分なほどはびこっており、これ以上発掘してほしくない、やめてくれなければ、頭がどうにかなくなってしまおうと彼は叫んでいる。

伯爵には「接触」を感じる感覚がある。しかしそれを思想化したり、そこに “ideas” を見るような精神性が欠如している。過去は現在に影響している。しかしそれは感覚的な意味に於てである。精神性によって過去と現在が能動的に作用しあうのではない。その意味に於て過去と現在は切れているのである。

伯爵の拒否にもかかわらず、発掘は行われる。発掘が始まるや伯爵は異様に熱意を示すようになり、作品は後半部に入る。伯爵は前半部になかった姿を示す。“Juno” 像が発掘され、伯爵はこの美しい女神像の虜になってしまい、妻を避けるようになる。奇行を繰り返す、その姿は気違いじみて見えるけれども、彼は「僕はとてつもなく幸福なんだ」 (“I'm prodigiously happy.”) と言う。かつて彼は “Hermes” 像を恐れたけれども、今や「世界で最も親しげで楽しいもの」 (“the friendliest, jolliest thing in the world”) になり、彼に話しかけてくれると言う。妻は、「あの人は決してきついことを言わないし、責めるまなざしで私を見たりしない。ただ私と縁を切ってしまっただけ。私は彼の生活からはみ出てしまった。」 (“He has never uttered a harsh word or given me a reproachful look. He has simply renounced me. I have dropped out of his life.”) と言い、「あの人の Juno が現実で私は架空のものよ。」 (“His Juno's the reality: I'm the fiction!”) と叫んでいる。

伯爵は、“Hermes” 像が語りかけてくれると言っているけれども、彼がなんらかの “ideas” を受けとっているかは疑わしい。彼は今や現在を忘れ、過去に生きている。彼は現在に働きかけることを忘れていた。妻の「縁を切ってしまっただけ」や「はみ出てしまった」という言葉が、彼の現在との関係の無さを表わしている。彼は過去

と現在を精神的に結合出来ないのである。少しでも精神的な結合が可能な人間ならば、妻に対して「きついこと」や「責めるまなざし」を与えたであろう。それが無い。過去へ行きっぱなしである。これは同時に現在に於ける彼の存在感の乏しさを示している。その原因は、彼の精神性の欠如にある。後半部に於て愛していた妻に冷淡になるという前半部とは異なった姿を示した伯爵だが、根本的には変わらない。

絶望した妻は、“Juno”を再び土中に戻す。戻すことによって伯爵は再びもとの姿に戻る。戻したことを喜びさえするのである。いとも簡単な結末であり、その簡単さが伯爵の意識構造を示しているように思われる。伯爵には「外面的感覚」があるけれども、“ideas”がない。伯爵に於て過去と現在が精神的に、重層的に結合されることはない。そしてそれこそ“picturesque”の美しい形態の底にある性格である。“picturesque”は、「外面的感覚」に依存した単一構造である。

### III

以上のような“picturesque”の性格は、*Daisy Miller*<sup>4)</sup> (1878)という作品にも見出せるように思われる。“The Last of the Valerii”の伯爵は、美しい形態を備えた人だが、“ideas”がなく、「愚鈍」であった。*Daisy Miller*のDaisyにも伯爵と似た要素が見られる。彼女はこの上なく美人である。そして“innocent”である。この作品のもう一人の主人公であるWinterbourneは、Daisyを理解しかねて次のように煩悶している。

Never, indeed, since he had grown old enough to appreciate things, had he encountered a young American girl of so pronounced a type as this. Certainly she was very charming; but how deucedly sociable! Was she simply a pretty girl from New York State—were they all like that, the pretty girls who had a good deal of gentlemen's society? Or was she also a designing, an audacious, an unscrupulous young person? Winterbourne had lost his instinct in this matter, and his reason could not help him. Miss Daisy looked extremely innocent. (p.19)

結局、Winterbourneは、Daisyに出会って以来彼女の死に至るまでこの煩悶を脱することができなかった。「魅力的」(“charming”)で「社交的」(“sociable”)なこの「アメリカ娘」(“a young American girl”)は、「油断

のならない、ずうずうしい、無節操な”(“designing, audacious, unscrupulous”)娘なのか、「無垢な”(“innocent”)娘なのかという煩悶である。引用した段階では彼は、「彼女は全く世間知らずなんだ。彼女は美しいアメリカのお転婆娘なんだ。」(“she was very unsophisticated; she was only a pretty American flirt.”)と判断している。

彼女の“innocent”は、「世間知らず」であって「愚鈍」ではない。しかし“ideas”ということに関して言えば、彼女もまた“ideas”をもちあわせていないと言える。伯爵の場合に於て“ideas”にこめた意味は、精神性ということであり、特に過去と現在の精神的結合を図ることのできるものということであった。彼女は饒舌である。しかし彼女は饒舌に違いないが、「いきなりその場と関係のないことを言い出した」(“she broke out irrelevantly.”)という言葉が示すように、彼女の関心はとりとめがない。彼女の関心は固定せず、常に動いている。そのような彼女に、過去の遺物に関心を固定させ、対象との間に精神的な相互反応を経験するように求めても無駄である。その例が、まず“the picturesque towers of the castle of Chillon”見物の場面に見られる。

この城は、この作品の第一部の舞台であるスイスの小さな町、Veveyから見え、一般的な習慣からいえば信じられないような早さで親しくなったDaisyとWinterbourneが、二人で訪れることを、最初に出会ったその日に決めたものである。Winterbourneは、想像力と「感受性」(“sensibility”)をもちあわせた男で、城への遊山に「何かロマンティックなこと」(“something romantic”)がおこるような期待をもっていた。しかし待ち合わせた彼女は興奮せず、会うなりしゃべり始め、「彼女独自の考えを次から次へと話した。」(“she delivered herself of a great number of original reflections.”)のである。そして城に着き、Winterbourneが城にまつわる話をしても、彼女は封建時代の遺物にほとんど興味を示さず、城の陰鬱な昔物語に感銘を受けていなかった。彼女に於て過去と現在は交錯しなかったのである。

同じような例が第二部の舞台であるローマに於ても経験される。ローマは遺跡の都市である。その過去の遺物の中にありながら、彼女は深い精神的交流を過去ともつに至らなかった。そしてWinterbourneとの間にもつかなかった。Winterbourneは“a lover of the picturesque”である。彼は、「ローマ皇帝の宮殿」(“the Palace of the Caesars”)でDaisyとめぐり会ったことがある。花が咲き乱れ、新緑の草木で蔽われた廃虚を美しいと感じた。そこで、「早春の新鮮さとその場所の古めかしさが、神秘的に入り交ってよみがえってくる」(“the freshness

of the year and the antiquity of the place reaffirm themselves in mysterious interfusion”) のを感じたからである。そしてそこにいた Daisy を美しく感じた。

Winterbourne は、想像力と「感受性」の持主であったから、「新鮮さ」と「古めかしさ」の融合をその場に見出したのである。しかしそこに “ideas” と言えるような深みがない。居合わせた Daisy がよく調和する “picturesque” な情景である。想像力を備えながら、その想像力が十分に働かされず、対象との間に深い精神的交流が得られない Winterbourne の姿は、「コロッセウム」(“the Colosseum”) を彼が訪れた時にも見られる。その場の情景は瞑想をかきたてるものであったが、彼は、「歴史的雰囲気」(“the historic atmosphere”) は「悪性の毒気」(“a villainous miasma”) であると考えて深い精神的力を働かそうとはしない。そこへ Daisy も来合わせたが、彼は彼女を見限ろうとしていた。その場の別れが結局、最期の別れになってしまう。Winterbourne は “picturesque” な情景を感覚的に味わうこと以上に歩み出なかったのと同様に、Daisy という “picturesque” な人間と深い精神的交流なしに終わったのである。

しかしながら、Winterbourne が想像力や「感受性」を十分に働かせて、対象に肉薄し、“ideas” を求めたとしたら、彼は “picturesque” を通り越してしまうことになるのである。そして Daisy に “ideas” があり、伯爵に “soul”

があれば、“picturesque” の中に二人は取りまきらなかったのである。更に “The Last of the Valerii” の画家が、画家でなくもっと観念性の強い語り手であったとしたら、“The Last of the Valerii” は全く様相の異なった作品になったであろうし、“picturesque” という概念も意味をなさなくなっているかもしれない。“picturesque” という概念には限界があることを忘れてはならない。

#### 注

- 1) Wordsworth の詩の Text は、Selincourt と Darbishire 編、*Wordsworth's Poetical Works* (Oxford Univ. Press) を使用。
- 2) *Poetical Works*, I, 62.
- 3) Text は、M. Aziz 編、*The Tales of Henry James* (Oxford Univ. Press, 1978), Vol. II を使用。
- 4) Text は、Penguin 版を使用。

#### 参考文献

- S. B. Daugherty, *The Literary Criticism of Henry James* (Ohio Univ. Press, 1981)
- V. H. Winner, *Henry James and the Visual Arts* (Univ. Press of Virginia, 1970)

(受理 昭和58年1月16日)